

堺の“まち”文化の再発見、再生、創造

< 目 次 >

1. 緒言・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
2. “堺”の再発見・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
3. 再生へのプロセス・・・・・・・・・・・・・・・ 4
4. 創造へのトライアル・・・・・・・・・・・・・・・ 7
5. 結言・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
6. 引用文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9

平成18年8月31日

市民活動団体“堺なんや衆”

理事 事務局長

前田 秀一

1. 緒言

平成12年（2000年）10月、堺市では、21世紀を直前に迎えて政令指定都市への移行を目指した「魅力ある都市づくり」に関するワークショップ「36人衆（仮称）」が開催（主催：堺都市政策部）され、性別、年齢を超えて議論を高めたが、その方向性は一様ではなかった¹⁾。

少子高齢化社会の時代における都市のあり方が大きく問われるようになり、“多様性”が都市の本質と位置づけられ活力の源泉であるという観点に立ち返って、それを最大限に重視した街づくりを推し進めることが必要であり、「生きた」都市づくりを目指して文化の再生を期すことが今後に求められた課題であることを浮き彫りにした。

このプロセスの成果として、平成13年（2001年）4月1日に市民活動団体“堺なんや衆”が誕生した。その名前の由来は、「堺の“納屋衆”」である。

中世の頃、世界的な自治・自由都市“堺”にあつて、自ら“まち”を治めた堺の有力商人たち10人衆を“納屋衆”と言い、今井宗久、千利休、山上宗二、津田宗及など“茶の湯”の文化を大成した茶人たちが含まれていた。

知っているつもりでも知らないことの多い堺のまちについて、旺盛な好奇心をもって「なんや？なんや？」と訪ね、再発見し、その文化的意義を現代に再生し、新たな文化として創造的に発展させることを活動の趣旨とした。「納屋衆」に「なんや？」という堺の好奇心を表すキーワードを重ねて「堺なんや衆」とネーミングした。

私も、設立会員の一人として当初から本来の“思い”を“形”にしたいと参加した。

設立当初1年目は、“文化”というテーマの広義性から、活動の方向づけやテーマの選択において価値観の多様性を集約することに苦勞し、必ずしも「会」の活動の出だしは順調ではなかった。

相互の“思い”をさらけ出し議論を重ねた結果、堺の“まち”文化をテーマとしてその再発見、再生、創造を目指し、「会」は、会員が個々に自分の“思い”を「会」に提案し、「会」が決定した活動テーマ（“思い”）を、提案者のリーダーシップのもと総意を揚げて“形”にするプラットフォームとして機能することを決定した²⁾。

「“まち”づくりは人づくり」と言われるが、活動のプロセスを大事にし、そのプロセスにおいて相互に自己実現の術を見出し自らを成長させることを目指した。

2. “堺”の再発見

1) 「堺」－その名前の起源と地元民の認識

(1) 辞書に見る「さかい」、「境」、「堺」の文字の相関

金澤庄三郎編；『新版・広辞林』（三省堂、昭和38年新版16版）によれば、「さかい」は境、界＝「くぎり」、「かい」は界、境＝「しきり」と書かれ、鈴木修次、武部良明、水上静夫編；『漢和辞典』（角川書店、昭和56年108版）では、「界」は「さかい」、「くぎり」、「しきり」、「堺」は「さかい」、「しきり」、「くぎり」を意味し、本来、「界」に同じ（同義語）と書かれている。

一方、宮本又次執筆；『国史大辞典』、第6巻（吉川弘文館、昭和60年）によれば、「堺」の地名は、熊野九十九王子の一つ「境王子」に由来し、摂津国・住吉郡と和泉国・大鳥郡にまたがり、この両国の境にあるところから「境」と称し、のちに「堺」となったとある。

(2) 「三国丘」の起源

『万葉集』 卷七 1367

「三国山木末（こぬれ）に住まふむささびの鳥待つが如われ待ち瘦せむ」

方違神社の「御由緒」によれば、「摂津国」住吉郡、「河内国」丹治比郡、「和泉国」大鳥郡の三国の境界にあることから「三国山」と詠まれた。

「三国山」は、「三国丘」とも称せられ、奈良時代には、僧行基がこの辻に伏屋を設け旅人の休憩に供したので、人馬往来の要衝であった。

方違神社は、三国の境にあって、どこの国にも属さず、方位のない清地にあるという考え方により、古より方災除の神として崇められ、平安時代のころから、熊野詣での通過地点として多くの人々が参拝した。

近代では、明治元年、東京遷都に際して17日間方違神社で祈祷が行われた。

(3) 「さかい」、「堺」の初見³⁾

イ. 「さか井」の初見

歌人・能書家として有名な藤原定頼（995～1045）の歌集『権中納言定頼卿集』（『群書類従』237）の詩書に、「9月ばかりさか井と伝所にしほゆあみにおはしけるに、ひめぎみの御もとに」と題して「すみよしのながみのうらもわすれてみやこへののみいそがるる哉」とある。

平安時代の藤原氏の盛んなころ、京都の公家達が、「さか井」に塩湯を浴びにやって来ていた。塩湯浴とは、水浴ではなく、海水や井戸水を沸かして風呂に入ることを言い、病人を治療することを目的としていた。

ロ. 「堺」の初見

白河上皇に仕えた藤原為房の『為房卿熊野参詣日記』永保元年（1081年）九月二十二日条に「申剋参住吉社奉幣 戊剋着和泉堺之小堂 住吉神主國元依罷 神主清経送粮米等」とある。つまり、為房が、京都をたつて熊野詣をする途中摂津国住吉社に奉幣したのち、“和泉堺之小堂”に到着して、住吉神社神主の津守國其の招待を受けた」とある。『堺市史』第1巻（三浦周行監修、昭和5年）によれば、「和泉堺之小堂」は、熊野街道沿いにつくられた熊野九十九王子社の一つ「境王子」ではないかとしている。

(4) 国境の“まち”「堺」^{3~5)}

はじめは、摂津国と河内国、のちに、和泉国が置かれるようになって、摂、河、泉三国の境界（「三国山」、「三国丘」）にある“まち”の位置づけから、特に、熊野詣が盛んになった平安時代より、「境」⇒「さか井」（1045年）⇒「堺」（1081年）と私称が展開して、後に、固有の地名として「堺」が「国境の“まち”」の同義語として認められるようになったものと思われる。

一世を風靡した中世の頃の堺の“まち”並みは、1615年（慶長20年）大坂夏の陣の大火で壊滅的に焼失し、それまで、「大小路」通りをはさんで、北側は、「摂津国」堺北庄、南側が、「和泉国」堺南庄としていた国境が不明となり、以後、大小路通り北側も「和泉国」として扱われるようになって来たといわれている。

「大小路」の初見は、1416年（応永23年）11月25日油屋助六畠地売券（開口神社文書）の四至に「おう小路三郎四郎の畠」とあることによると言われ、1958年（昭和33年）堺市が、当地に「泉摂両国堺南北両庄の界大小路」石碑を建立した。

堺が、和泉国として人々の中に溶け込むのは、国境が不明となった江戸時代前半・元禄年間（1688～1704年）ごろで、特に、1704年新大和川の付替えによって、さらに住民認識の変

化が促された。

今も、「遠里小野」、「浅香」の地名が新大和川の南北両岸にあって、その名残を伝えている。

元禄 17 (1704) 年 2 月 27 日、新大和川の付替え工事は川下にあたる堺の海側からはじめられた。『河内堺新川絵図』には「御鋤初」としてこの日が記されている。

1889 年 (明治 22 年)、人口 3 万人以上の全国 35 ヶ所に市制が施行され、その時、大阪府下で、大阪市と同時に堺市 (人口 : 47,000 人) が誕生した。初代市長に一橋作兵衛、市議会議長に北田豊三郎、同年 7 月 26 日に、開口 (あぐち) 神社に市役所を開設した (開庁記念日)。その後、市役所は、1892 年 (明治 25 年) 旧奉行所跡 (現殿馬場中学校、泉陽高校付近) に移り、さらに、1944 年 (昭和 19 年) に現在地に新庁舎建設して移転した。

1895 年 (明治 28 年) に、摂津、河内、和泉の三国の境に位置する要地であることを表して「市」の文字を三つ組み合わせさせた市章が制定された。

2) 堺を特徴づける歴史的文化^{5~8)}

第 1 期 (紀元前 4 ~ 2 世紀)

石津川流域下流左岸に四ツ池集落遺跡が存在し、三方を崖と自然の河川に囲まれた 3.5 ヘクタールの地に「国」と呼ばれる集落 (ムラ) が形成され、石津川を利用して、直接、茅渚 (チヌ) の海 (現大阪湾) に漕ぎ出す舟運の便に恵まれていた。

そのムラには、水田稲作の文化があり、食糧の大量生産体制が整い、大、中規模の墓が存在し整備されたムラであり、さらに、銅鐸も発見され金属器の使用が考証されている。

第 2 期 (5 ~ 10 世紀) 巨大な古墳が造成され、須恵器の生産が盛んになった時期

仁徳天皇が高津の宮を営み、在位中から百舌鳥の地に巨大な大仙古墳を築造された。そのほかに履中陵 (百舌鳥陵山古墳)、土師ニサンザイ古墳、御廟山古墳、反正陵 (田出井山古墳) など大型古墳群が集中して築造された。

これらの築造に携わった人々、食糧、物資の集中は、それまでに例を見なかった賑わいと想像される。

また、5 世紀前半ごろ、陶邑で、朝鮮半島南部渡来の工人による須恵器の生産が始り、平安時代まで約 500 年間続いた。新技術によって作られた硬い須恵器は、全国の需要を招き、列島住民の生活をも改変した。

1962 年、泉北地域の開発に先立ち発掘調査の結果、陶器山、高倉寺、梅、光明池地区などで 600 基以上の登り窯が発見された。

この時期に、僧行基 (668 ~ 749 年) が活躍した。

第 3 期 (1469 ~ 1615 年) 町人による自由・自治都市、南蛮文化渡来の時代

遣明船が、応仁・文明の乱 (1467 ~ 1477 年) による焼失で当初予定の兵庫港に入港できず、堺港に入港して以来堺港が遣明船の発着港となって栄えた。

前半期 (1469 ~ 1550 年) は、東アジア貿易として遣明船貿易 (1469 ~ 1523 年) と琉球 (対明貿易のハブ港) 貿易が栄えた。後半期 (1550 ~ 1615 年) は、南蛮貿易が始まり、鉄砲の伝来により堺は、政治、経済と併せて軍事戦略上の重要な都市となって発達した。

堺の町は、会合衆といわれた町人自らが治め、とりわけ、「納屋衆」といわれた有力商人 10 人が力を持っていた。

これら商人の中には、千利休、今井宗久、津田宗及、山上宗二など茶人と言われた人たちが居り、特に、千利休 (1522 ~ 1591 年) は、独自の美意識ともてなしの心を理念として「茶の湯」の文化を大成した。

第4期（1868～1900年初頭）「堺県」設置、「新しい人間像」与謝野晶子の時代

明治に入ると廃藩置県により堺が明治政府の直轄地となり、1868年「堺県」として、現在の奈良県を含む大きな行政区域に昇格し、1881年2月に大阪府に編入されるまで続いた。

1901年、与謝野晶子（1878～1942年：堺県堺区甲斐町生れ）が第一歌集『乱れ髪』を刊行して脚光を浴び、以後、近代日本文学史のジャンルを開き、女性の経済的自立を訴えて活動し近代の「新しい人間像」として黎明期を担った。

3. 再生へのプロセス

1) 堺の都市像

立地的には、百舌鳥古墳群があり、古市古墳群と併せて日本の3大古墳を擁し、これらは、日本の最初の官道（国道）と言われる丹比道（たじひみち：後の竹内街道）で結ばれ、さらにその東には、日本の国づくりに関わった要人たちの陵墓・古墳群点在する「王陵の谷」につながる歴史的な遺産の要地である。

民衆の自由、平等、共生に基盤を置く堺の潜在的な文化力には、一人のヒーローのみを生むのではなく、これら民衆集団の中に本来的にある潜在能力者の中から代表してヒーローを生み出す文化基盤のある都市である。

中世の頃の堺の商人は、東アジア貿易（遣明船貿易、琉球貿易）と南蛮貿易によって資力を貯え、そのゆとりある生活の中から「茶の湯」の文化が醸成され、千利休が、「もてなしの心」を理念とする「寄り合いの文化」として大成した。

応仁・文明の乱（1467～1477）で焦土と化した京都の文化や僧侶を受け入れ、その富の多くを京都の寺院の再興に供し、堺の寺院建立に投じて泉南仏国（約300寺）を築いた。

南蛮文化の渡来のなか鉄砲が伝来し、堺の匠たちは標準化に基づく協業方式で大量生産体制を創出し近代戦術の幕開けを演出した。さらに、包丁、自転車など金属加工業の匠の“まち”として今日にいたる固有の地場産業をもたらした。

優れたシステムを持った生産都市は、ヨーロッパの都市のように町人による共和制をしき自治・自由都市として海外に開かれた国際貿易都市となってわが国最初の都市ブルジョワジーの台頭となった。

行基や与謝野晶子は、当初は、反社会的な活動として認められなかったが、その功績は、無視することが出来なくなり、後には、行基は、聖武天皇よりわが国最初の大僧正に任ぜられ、与謝野晶子は、近代日本文学史および女性運動の先駆者として社会的に評価された。

堺は、行基、千利休および与謝野晶子に代表されるように、視野を広く、思いを深め、自分の意思を最後まで貫き通す進取な精神を持ち合わせた人材の輩出を促す文化力に長けた“まち”であった。

これら先人の伝統は、“まち”づくりにおいて自己責任、自己決定が求められる現代の規範に通じるものがあり、未来の都市像の創造に当たって堺市民として認識を新たにすべきである。

2) 「茶の湯」の文化論^{8, 9)}

今日に見られる「茶の湯」の文化は、1191年、栄西禅師が中国から持ち帰った当初重宝された「薬効」や「茶禅一味」という宗教的なものではなく、日本的な美意識や倫理観を基本とする独自の文化として築き上げられている。

その原点は、16世紀の頃、アジア経済の中核をなし、世界的にも注目された自由・自治都市「堺」にあって、有数の商人（経済人）でありながら、鋭い美意識と哲学で人を心からもてなすこ

とを理念として、作法、点前などソフトの面に加え、道具、料理、露地(茶庭)、数寄などハードの面に至るまで創意工夫を尽くし、独自の「侘び」の空間を創出した武野紹鷗、千利休を軸に堺の商人文化として「もてなし」の心を基本に据えて確立された。

堺の「茶の湯」の文化は、応仁・文明の乱(1467～1476年)から逃れて来た京都の公家たちがもたらした能楽や歌道(連歌)など、さらには、僧たちによる奈良、京都の寺院文化など日本古来の文化や芸術の美意識を根底として、日本的な思想の体系化されたものである。

「茶の湯」の文化は、言葉として「冷(ひえ)」・「凍(しみ)」・「寂(さび)」・「枯(かじけ)」に代表される「寂(さび)」を基本とし、「深奥の美」、「無の美」とも言うべき美意識をこの道(「茶道」)の秩序、価値観として確立している。

堺の茶人は、相当な覚悟と責任感を持った決断力で道具の「目利き」をするほどに豪胆な人物像を持ち合わせ、洗練された芸術家でありながら、現実的な商業展開も見据えた経済人であった。

自由都市・堺は、経済に裏付けられアジアの中核都市として世界に先進し、堺の「茶の湯」の文化は、確かな文化としてヨーロッパにも伝えられた。

ジョアン・ロドリゲス(ポルトガル人、1561～1639年:1577年15歳で来日)は、日本についての30年間の研究の成果を『日本教会史』(全3巻*)に著し、その第1巻の2/3を「もてなしの文化」論について書き残した。

***: 第1巻: 日本、第2巻: 中国、第3巻: フランシスコ・ザビエル**

ヨーロッパ人は、堺に来て、はじめて「茶の湯」の現場を見て驚いた。当初、「茶の湯」は、奇妙な風習、飲み物と素朴に疑問に思った。

なぜ、一椀のお茶を飲むのに小屋(茶室)を建てるのか?

何故、隅の方(にじり口)から身をかがめて入るのか?

茶碗は、鳥かごの鳥に水をやるような器

茶碗の値段は、イエズス会日本支部の1年間の予算より高い

狭い部屋での堅くるしい作法、儀式

そこに見た現実から、日本人独特の武士道的価値観をうまく取り入れながら発想された「侘び」、「寂び」の理念としてではなく、日本の生活文化に基づく「もてなしの文化」という独自の「茶の湯」の文化を見出した。

本来の「もてなし」とは、応接、礼儀作法、料理、酒、お茶と豪華な宴会のもてなしを基本としていたが、応仁・文明の乱(1468～1486年)、戦国時代(1490～1570年)など、下克上の無秩序の世の中にあっては、そのような接待宴会が成立しなくなり、やむなく、その一式を凝縮した形で最後のお茶席だけを独立させ、人間不信の時代に人間相互の信頼関係の回復と新たな人間関係の形成を目指した作法が創造された。

家の造り、造作、作法を徹底して凝縮し、主人が、客の目の前で全てを公開しながら濃い茶をたて、廻し飲み(毒物注入の嫌疑を払う儀式)をしてもてなし、信頼感の漂う人間関係の形成を目指した空間は、身分を離れ、主客対等で、安全が保証された聖なる空間として位置づけている。

3) 「CHAの心」の実践^{8) 9)}

「茶の湯」の文化には、大成された当初、流派と呼ばれるものは無く、形式も格式も重んじることなく、「もてなし」の心を理念とした創意工夫を尊び、茶人個々の人となりに重きを置く風習があった。また、茶人達は、商業の面でも進取の気概にあふれ、堺の“まち”の興隆に尽

力した。

堺市博物館館長・角山 榮先生は、「茶の湯」の文化の本質は、「茶」という飲み物を媒介として「ふれあい」Communicationと「もてなし」Hospitalityによる「人間関係の形成」Associateにあると考えられ、「CHAの文化」の理念を提唱された。21世紀は、諸民族との共生、諸文明共存の時代であり、平和の維持と平和の心は「茶=CHA」の心であり、「茶の文化」の理念に通じるとされている。

堺の茶人たちの「こころ」、「生きざま」に立ち返ってその原点を考える試みとして、勉強会「CHAの文化セミナー」の開催を企画し、実施した。

千利休に大きな影響を与えた武野紹鷗を中心として、千利休の「茶の湯」を記録として伝えた山上宗二および「堺千家」継承の夢を果たせなかった千道安を取り上げた。

普段取り上げられることの少ないこれら茶人たちを中心に、文化、芸術、そして倫理観としても突出していた「茶の湯」の文化、それを成熟させつつあったかつての堺の有様を茶人を通して知ろうという試みであった。

野村美術館学芸部長・谷 晃先生（茶道史）には、「京衆」と「堺衆」という対立軸の中で『山上宗二記』が堺派の一種の勝利宣言書として書かれたこと、千利休は、武野紹鷗を結果的にはなんらか利用しようとした政治的でもある人間性についてお話があり、作家・斉藤史子先生（元高野山大学講師）からは、山上宗二は各地を転々としたからこそ書き留めることを身につけたこと、侘び茶の真髄にいたる千利休の境地に山上宗二の死が少なからず影響したこと、堺では千道安に継がせようとしていたが、千道安の生涯とその後の堺の衰退が重なった皮肉な状況など普段は聞くことの少なかったそれぞれの生々しい生き様を知ることが出来た。

堺市教育委員会・井溪 明先生（学芸員）には、堺衆が「茶の湯」を美的な文化として高尚に位置づけていたことを、堺市博物館長・角山 榮先生には、「日本における茶葉の自生」に関する新説の紹介を含め、ヨーロッパ人（ジョアン・ロドリゲス）にして、「茶の湯」の文化が、根本的に人間関係を重視する堺独自の文化であり、理念であることを見出され指摘されたことを紹介された。そして、現代こそ、この人間関係を重視した理念が重要な時代にあることを説かれた。

こんにち、「まちづくり」において、地域の文化や芸術に発想をめぐらせることにその価値評価が高められているが、西洋のルネサンスと前後して、堺が日本の文化の中心をなしていたということは、私たち堺市民にとって精神的支柱とも言うべき心強いものを感じることが出来た。セミナーと併せて、千利休が、「茶の湯」の文化を大成した背景を実体験することを目的として、セミナー開催日の午前中に、当時の町名、町並みおよび文化を見聞する会を開催し、講演の理解に幅を持たせる工夫を取り入れた。

さらに、いろいろな風俗習慣によるところが大きい“世界のお茶”を自分達で点て、“ふれあい”や“おもてなし”の空間づくりを実地に行う“世界のお茶”「寄り合い文化席」を設けた。

その目的は、主客がより身近に“おもてなし”を実感しながら体験を通して“CHAの心”を学ぶ“ふれあい”懇話会として開催するところにあった。

つまり、「茶の湯」の作法、道具の見立て、お茶菓子の選定、お茶の味わい方などに込められた本来的な“おもてなしの心”を踏まえる一方において、そこに留まることなく、さらに、より日常的な煎茶や紅茶を初めとする世界の人々に楽しまれている世界各国の「茶の文化」（インド、中国、モンゴル、ミャンマー、ベトナム、タイ等）を通して“ふれあい”の機会を広げることに意義を置き、堺発の新たな文化として「もてなし茶会」の発信を目指した。

4) 今後の展開

平成 18 年（2006 年）3 月 30 日（木）、シンポジウム「堺・南大阪地域学における地域活性化への展望」（主催：大阪府立大学）において、北京大学・外国語学院日本語文化学系・藤 軍 副教授が、「堺商人が茶人に変身する過程を論ず」と題した講演の結論として「堺商人は、日明貿易に加わって不当な利益を上げ、中国の名品を大量に独り占めした物質的基礎の上に立って、足利幕府の書院茶道を継承した文化価値観を前提とし、茶会を利用して商売のやり取りや政治のやり取りを行うという実際上の要求のもと一部の豪商が商人から身を起し茶人に変身し、日本の草庵茶道の先駆となって日本の草庵茶道の基礎形成を促した」と述べられ¹⁰⁾、「CHA の心」とすることが理解されなかったことを残念に思った。

平成 15 年 10 月 24 日、「堺市・連雲港市友好提携 20 周年」記念事業「中国文化セミナー“徐福”」（連雲港市は、秦の始皇帝の方士“徐福”の生誕地）において、堺市博物館館長・角山 榮先生が、「徐福が求めた不老長寿の仙薬」と題した講演の中で、それは「お茶」ではなかったか？とお話になり大方の関心を得られた。

中国では、「お茶」は日常的な嗜好に加えて「薬効」としての扱いがあり、日本のような生活文化としての考え方は普遍的ではない。その一方で、友好都市・連雲港市には、広大な「徐福茶園」の中に、日本の“おもてなし処”に相当する「徐福茶楼」が設けられ、友好都市・堺の「茶の湯」の文化が理解される背景をうかがうことが出来た。

堺市と連雲港市の 20 年を超える友好提携の絆を軸として「茶の文化」（仮題）を領市民交流のテーマとして位置づけた展開のあり方を考えてみたいと思う。

堺市民はもとより、茶どころとしても知られるところの多い“徐福”渡来伝承各地（有力な伝承地として、鹿児島県・串木野市から青森県・小泊まで 20 箇所）および“徐福”通過伝承の地・韓国の市民にも呼びかけ、堺市と連雲港市の友好交流を絆とした「茶の湯」の文化を軸とした東アジア圏文化交流として、新たな堺の“まち”文化の再生のあり方を求めてみたい。

4. 創造へのトライアル

堺の“まち”づくり活性化事業に協賛して、“世界のお茶”「寄り合い文化席」を開設し“ふれあい”と“もてなし”の心を通して“人間関係の形成”を図る“CHA の心”の実践を試み、延べ 562 名の人々との出会いがあった。

平成 17 年 5 月 5 日（日）、そのふれあいの中から「仙臺すずめ踊り」が、歴史的に堺と縁のある踊りであることを知った。

1) 現代を生きる伝統芸能－「すずめ踊り」の人類学的研究¹¹⁾

約 400 年前、慶長 5 年（1600 年）に伊達政宗が仙台城を築城することとなった。城を築く石工として、大阪城築城に関わった泉州堺の黒田八兵衛、その他辻本七郎兵衛、鹿野清左兵衛、能島与右兵衛らの石工頭が仙台に招かれ、仙台城の造築は慶長 6 年 1 月に着工した。石工たちは、国見峠付近から石材を掘り出し、牛にひかせて牛越橋を渡り川内まで運んでいた。

工事は着々と進み、慶長 8 年（1603 年）8 月、江戸から帰ってきた伊達政宗は、移徙式（新築移転の儀式）を行った。その祝宴のさなか政宗は、石工たちに踊りを所望したという。突然命じられた石工たちは、即興で踊り始めた。泉州堺の石工達が中心で、小気味良いテンポの早い形になったようだ。躍動感あふれる身振り、伊達家の家紋が「竹に雀」であったこと、はね踊る姿が餌をついばむ雀の姿に似ていることから、誰言うともなく「雀踊り」と名付けられた。

以来、『雀踊り』は、仙台市石切町（現在、仙台市青葉区八幡町）に居住する石工によって

踊り継がれ、戦前までは、毎年、政宗公が建立した大崎八幡神社の祭礼に奉納」(仙台市立第一中学校、1997年)され、石切町にある瀬田谷不動尊の祭礼でも奉納されるのが通例となった。

2) 伊達政宗と堺との関わり^{12~14)}

天正18年(1590年)、豊臣秀吉からの度重なる服従勧告の末、伊達政宗は、小田原城での拝謁に際し千利休への茶道教授の願いを申し出、そのことが豊臣秀吉の怒りを懐柔することとなり、無事危機的状況を脱したと伝えられている。その後、茶の湯をはじめ、和歌、連歌、能など堺に関わりの深い文化をたしなみ、伊達政宗の人生に大きく影響した。

また、堺の商人・今井宗薫(「茶の湯」三大宗匠・堺商人・今井宗久の子)が、以下の事例に見るように、伊達政宗と親密な関係にあり、仙台城(旧千代城)の再興築城に際して大きく関わっていたことが考証されている。

イ. 慶長4年(1599年)1月20日、有力大名との関係を深めようとする徳川家康の意を受けて、伊達政宗の長女・五郎八姫(いろはひめ)と徳川家康の六男・松平忠輝との婚約(1606年12月24日結婚)に尽力した。

ロ. 慶長5年(1600年)10月中旬、伊達政宗と徳川家康との仲介役になって、関ヶ原合戦の恩賞について斡旋を依頼している。

ハ. 慶長6年(1601年)4月18日付にて、仙台城普請の経緯を知らせた書状が残っている。

3) 新たな堺市民文化として「仙台すずめ踊り」の普及

(社)堺高石青年会議所50年祭(平成17年6月5日、堺市・大仙公園)で、ヨサコイ踊りチーム「堺・鳴組」と協働して「仙臺すずめ踊り」を紹介した。引き続き、堺市(観光部)に平成17年度「堺まつり」へ「仙臺すずめ踊り」を400年ぶりに里帰りさせることを提案し、第32回「堺まつり」(平成17年10月14日~15日)において実現し堺市民の反響を呼んだ。

平成18年1月26日に“すずめ踊り”が表す“喜び”、“楽しさ”、“物語性”を人と人とのふれあい、世代間のふれあい、地域の活性化につなげ、「人が輝き!地域を元気に!」を合言葉に“すずめ踊り”を新たな堺の市民文化として普及させることを活動趣旨として「堺すずめ踊り普及会」を設立した。

活動の目標として、以下の二つを掲げた。

1. 堺市内行政7区に少なくとも一つの祭連を立ち上げる
2. 「仙台青葉まつり」(5月)と「堺まつり」(10月)を相互の交流の場とする

平成18年5月20日~21日にかけて開催された「仙台青葉まつり」(参加107団体・3,700人、観光客92万人)へ、「泉州堺雀連合」祭連として参加し、仙台市民から熱烈な歓迎を受け、10月の「堺まつり」への「仙台市民連合」祭連としての参加が約束された。

今後備えて、創造的新たな市民文化として普及するために、“仙臺すずめ踊り”に関する情報交換を密にし、客観的な史実および民俗学的な考証に裏づけられた文化的背景を明らかにすることが必要であり、その構築を目指して仙台市民とともに勉強会の設立を提案し、あり方を検討する。

5. 結言

「人生五十年、外天(一昼夜が人間界の50年に当たる四天王)の内とくらぶれば夢まぼろしのごとくなり」、織田信長は謡いながら“思い”を半ばにして逝った。

平成12年7月31日、かれこれ40年に及ぶ会社勤めを終え、その後半、住み慣れた在京(勤務:東京・日本橋、居住:さいたま市・浦和)の地を離れる段に至って、中世のころ世界的に一世を

風靡したかつての大都市でありながら、“堺”の知名度が極めて低いことに強い衝撃を感じた。

“堺”。現実の問題として、確かに、表面的には古の栄華を伝える状況にない。その文化の息づきは、今もなお確たるものがあると信じていたいと言う衝動が、ライフワークとして自らの手で、堺の歴史文化および都市魅力を再発見して伝え、再生し、出来ることなら創造の次元にまで引き上げてみたいということに繋がった。

自らにミッションを課し、さらに重みを増して来た自分の残りの時間を「“思い”を“形”にする」NPO活動に費やしてみたいと今までに味わったことの無い充実感に満たされていることがなよりの励みとなっている。

世相では「歴史認識」が国際問題を左右している。NPO活動を通してさらに身近に感じてきた。「歴史を未来に！」。私の“自己実現”がどのように未来につながっていくのか、大きな「夢」として追ってみたい。

6. 引用文献

- 1) 堺市都市政策部；『魅力ある都市づくり検討資料作成業務報告書』（堺市、平成14年3月）
- 2) 市民活動団体“堺なんや衆”パンフレット
- 3) 西田孝司「堺の地名のおこりと国境の変遷」；月刊生活文化、No. 236, 2(2004年1・2月号)
- 4) 『日本歴史地名大系第28巻—大阪府の地名II』（平凡社、1986年）
- 5) 関 英夫『堺の歴史』（山川出版社、1975年）
- 6) 三浦周行監修『堺市史』（堺市、昭和5年）
- 7) 豊田 武『堺—商人の進出と都市の自由』（至文堂、昭和41年）
- 8) 角山 榮『堺—海の都市文明』（PHP研究所、2000年）
- 9) 角山 榮『堺の茶人たち 茶の文化の原点を考える』、100頁（堺なんや衆、平成18年）
- 10) 藤 軍；堺・南大阪地域学による地域活性の展望、19頁（大阪府立大学、2006年3月）
- 11) 津村晃佑；東北人類学論壇、第2号、39頁（東北大学文学研究科文化人類学研究室、2003年3月）
- 12) 桑田忠親『千利休』中公新書610（中央公論社、昭和56年）
- 13) 仙台市史編纂委員会；『仙台市史』通史編3近世1（仙台市、平成13年9月1日）
- 14) 逸見英夫、伊達泰宗『独眼流政宗の素顔』（宝文堂、1996年）

以上